

贈内詩の流れと元稹

姜 若 冰

京都大學

一 はじめに

中唐詩人元稹（七七九—八三一、字微之）の詩は、「三遣悲懷」をはじめとする一連の悼亡詩が、これまで比較的多く論じられてきた。^① 悼亡詩は、元稹が先妻韋叢の死を悼んで作ったものである。先行研究にも屢々指摘されているように、現存する元稹の詩作の中で、三十數首にもものぼる悼亡詩は、質量とも先行文學を上回り、優れた作品として定評がある。^② また、元稹自身が元和十年に書いた「敘詩奇樂天書」^③の中で、自ら詩集を編集する際の分類について、「不幸少有伉儷之悲、撫存感往、成數十詩、取潘子悼亡爲題（不幸にして少くして伉儷の悲しみ有り、存を撫し往に感じて、

數十詩を成す、潘子の悼亡を取りて題と爲す）」と語った言葉から、彼が悼亡詩を創作する際に、晉の潘岳の悼亡詩を意識したことが分かる。

しかし、元稹の詩集を通覽してみると、意外な現象に氣が付く。意識的に作られた作品群「悼亡詩」と比べて、日常生活の中の妻に關する詩はかなり少ないのである。先妻の韋叢については、悼亡詩を除けば、詩の中で彼女に言及しているのは、わずか六年の短い結婚生活ではあるが、その中でもただ一回のみ。そして、元稹と元和十一年に結婚してから、彼が五十三歳で亡くなるまで、十數年間共に生活を送っていた繼室の裴淑についても、言及しているのは十首足らずである。その内、裴淑が詩の直接の對象となっているものは、四題五首に過ぎない。^④

中國古典詩の世界に於いては、詩人たちは自分の妻に關する詩を書き残したりすることが極めて少ない、という點については、中原健二氏が論文「詩人と妻——中唐士大夫意識の一断面——」の中で指摘され、また、氏の考察によると、このような狀況は中唐期を境に變化を見せ始め、妻

に關する詩はより多く作られるようになり、詩の内容も「離思」から日常生活のやりとりへと次第に具體化したという。氏の論文ではここで、元稹の先妻を悼む悼亡詩と繼室裴淑に言及する詩をともに例として引用し、他の詩人と共通點に注目している。しかし元稹だけを考える場合、前に述べた現象は問題になってくるだろう。日常生活の中の妻に關する詩をほかの詩人と比べてみると、元稹の詩では、やはり少ないのである。例を挙げれば、李白には、「贈内」、「寄内」と題する詩は十一首もある。中唐の權徳輿の『權載之文集』第十卷に收められている三十二首にも^④のぼる詩のすべては彼の妻に關する作品である。また、元稹の親友白居易も、「贈内」、「寄内」と題する詩をはじめ、妻に關する詩を數多く残している。こうした時代の流れの中で、悼亡詩の創作において成功を収めたと言える元稹は、同じく妻に關する詩としての贈内詩には、なぜさほど興味を示さなかつたのだろうか。

元稹の詩集は、白居易の詩集のようにほぼ完全なかつたで残っているわけではないので、散逸した可能性も考えら

贈内詩の流れと元稹（姜）

れなくない。^⑦しかし、元和十年までの作品について、妻に關する詩は悼亡詩のような一つのまとまつたかたちにはなっていないかつたことが、前述の元稹自身の編集に關する言葉からまず分かつている。よつて、ここでは、元和十年以後の繼室裴淑に關する詩を、本稿で考察對象として検討を加える。ここで結論を先にいつてしまふ嫌があるが、詩は僅か數首で少ないものの、實は同時代の他の詩人の贈内詩とは異質なものなのである。

中原氏の論文は時代の變化に着目して、妻に對する愛情を公言するようになった中唐士大夫に共通する意識を中心に展開されている。本稿では視點を變えて、代表的な詩人の詩を重點的に取り上げ、詩に表された詩人とその妻の關係に注目したい。中唐にいたるまで、また中唐の間にも見られる時代變化の軌跡はどのような形で詩の内容及び表現方法の中に現れているのか、同じく妻に對して感情を表現するに當つて、詩人はそれぞれどのような眼差しを妻に向けているのか、詩に反映されたその時代ならではの色彩と詩人の氣質を中心に考える。時代の流れの中に置いて、

また他の詩人、特に親友である白居易の作品と比べることによって、元稹の獨自性を見出したいと思う。

二 贈内詩の流れとその性格の變化

妻に關する詩は、妻を直接の對象とするか否かによつて、二つの種類に分けることができる。本稿では、「贈内」、「寄内」など、詩題の中で妻に言及し、妻と關わる事柄を詩の契機とする作品を主な考察對象とする。『玉臺新詠』では妻に關する詩が多く蒐集されていて、その中で比較的早い作品としては、漢の蘇武の「留別妻」や秦嘉の「贈婦詩」三首が數えられる。しかし、蘇武の詩は後人の偽作であるとされており、秦嘉その人についても、はっきりしない。明瞭に文人の手によつて作られた贈内詩は、悼亡詩の嚆矢とされる潘岳の「内顧詩」二首である。では、潘岳の詩を出發點に贈内詩の流れを辿つていくことにしよう。

(1) 潘岳の「内顧詩」其の一。^⑨

靜居懷所歎 靜居 所歎を懷い

登城望四澤	城に登りて	四澤を望む
春草鬱青青	春草	鬱として青青たり
桑柘何奕奕	桑柘	何ぞ奕奕たる
芳林振朱榮	芳林	朱榮を振るい
綠水激素石	綠水	素石を激す
初征冰未伴	初め征きしとき	冰未だ泮 <small>と</small> けず
忽焉振絺綌	忽焉として	絺綌を振るう
漫漫三千里	漫漫たり	三千里
迢迢遠行客	迢迢たり	遠行の客
馳情戀朱顏	情を馳せて	朱顏を戀い
寸陰過盈尺	寸陰	盈尺に過ぐ
夜愁極清晨	夜愁	清晨に極まり
朝悲終日夕	朝悲	日夕に終わる
山川信悠永	山川	信 <small>まこと</small> に悠永たり
願言良弗獲	願うも	良に獲ず
引領訊歸雲	領を引いて	歸雲に訊い
沈思不可釋	沈思	釋くべからず

潘岳のこの詩は、遠い旅路にいる自分が抱いた妻への思

いを述べる作である。既に遠く、そして長く妻と離れていたことに気がついて、城壁に上り、草木が生い茂る春の盛んな様子を眺めながら、季節の移り変わりりと妻との間にある空間的距離を感じ取って嘆く。詩の終わりに、「夜愁極清晨、朝悲終日夕、山川信悠永、願言良弗獲」と、朝から晩まで、日々に續く悲しみ、山や河など自然物は妻と自分の間に立ちほだかり、會いたいと願っても叶わないといい、自分の置かれた寂しさに満ちる時間と、妻との間を隔てる無限の空間、そこに無力さを感じる詩人の姿が印象深い。

しかし詩の中の詩人と妻の關係を考えてみると、妻は詩人の感情を託す対象として存在するに過ぎなかつたのである。妻その人については、一句目の「所歡」と十一句目の「朱顏」でしか言及されておらず、その言葉自體も「我が妻」と「女性」という抽象的な意味だけをもつていて、具體性に乏しい。また、全編を通して一貫して詠われている妻への思いも、妻との間における特定な感情ではなく、季節の移ろいと人間を隔てる自然界の無情さなど、いわゆる「推移の悲哀」^⑩ という普遍的な感情と結び付けられている

贈内詩の流れと元續（姜）

のである。このような自然の代謝によって自らの感情を表現する特徴は、西晉時代の文學に共通する一つの方法として、彼の悼亡詩の中でも見られる。^⑪ 中原氏は、唐以前の贈内詩は、悼亡詩と大變似たような状況、つまり妻との生き別れの状況下で作られたのであると指摘した。その通りと思う。潘岳の詩は、その恰好な例と言えよう。

そもそも、贈内詩の原點は、妻を描こうとする意欲にあるのではなく、レベルの差こそあれ、實は悼亡詩と同じく、妻との別れによって引き起こされた詩人自身の波動にあるのであろう。妻という身近な存在であるからこそ、詩人に與えた衝撃は大きい。こうした衝撃がもたらした感情の動きそのものが贈内詩の生まれた源であり、また贈内詩の内容容として表出されていたのである。

以上、贈内詩の原點を確認した上で、唐代の贈内詩の變貌をみていこう。

(2) 蘇頌の「春晚紫微省直寄内」^⑫

唐代は李白に至るまで、贈内詩の創作はまだ少ないが、

李白より少し前の人、蘇頲には、この一首がみえる。

直省清華接建章 清華に直省して 建章に接す

向來無事日猶長 向來 事無く 日猶お長し

花間燕子棲鳩鵲 花間の燕子 鳩鵲に棲み

竹下鸚鵡繞鳳凰 竹下の鸚鵡 鳳凰を繞る

內史通宵承紫詰 內史 通宵 紫詰を承け

中人落晚愛紅粧 中人 落晚 紅粧を愛す

別離不慣無窮憶 別離に慣れず 無窮の憶い

莫誤卿卿學太常 誤る莫かれ 卿卿の太常に學ぶを

中原氏の指摘によると、この詩の新しさは、その日常の職務の中で、妻に詩を贈ることにある。確かに、この詩では、遠く離れた状況にあるのではないが、しかし、公務によって暫く共にできない状況という點では、やはり離思の延長線の上に立つ。

だが、この詩で表現された妻との關係は、氏のいう「妻への心情はたった二句にしか表現されていないし、離れた妻を思いやる點ではこれまでのものと變わらない」というよりも、いま一步進んで、單なる妻への思いではなく、官

僚として高位に登ったばかりの夫の妻に對する誇りというのが相應しいのではなからうか。詩は、六句目までは、題の紫微省を承け、「建章」、「鳩鵲」など漢代の宮殿名と、「鳳凰」という宮中の池、また「內史」と「中人」の行爲など、もっぱら禁中特有の様子を描いている。ようやく妻と關わってくる最後の一聯も、七句目の「別離不慣」ではまだこのような離別に慣れていないといい、妻への思いは、詩人が禁中宿直で感じている新鮮さの一部分としても理解しうるし、また最後の一句「莫誤卿卿學太常」の「莫」も、過去でも現在でもなく、將來のことに對して發している言葉であり、ここから詩人の自己の將來への誇らかな心情が感じられる。「太常」とは、宗廟禮儀を司どる官職であり、ここでは後漢の周澤のことを指している。『後漢書・儒林列傳』に見える。

周澤字穉都、北海安丘人也。……數月、復爲太常、清
一 絮循行、盡敬宗廟、常臥疾齋宮、其妻哀澤老病、闕問
所苦、澤大怒、以妻干犯齋禁、遂收送詔獄謝罪、當世
疑其詭激、時人爲之語曰、生世不諧、作太常妻、一歲

三百六十日、三百五十九日齋。

周澤、字は穉都、北海安丘の人なり。……數月、復た

太常と爲る、清絜して行に循い、盡く宗廟を敬う、常

に齋宮に疾に臥す、其の妻澤の老病を哀れみ、その苦

しむ所を闕問す、澤大いに怒り、妻の齋禁を干犯する

を以て、遂に詔獄に收送して謝罪せしむ、當世其の詭

激を疑い、時の人之爲に語りて曰く、世に生まれて

諸わざるは、太常の妻と作す、一歳三百六十日、三百

五十九日齋す。

この故事の核となつてゐるのは、周澤の眞面目な仕事ぶり、妻を顧みないことの両面、いわば「公」と「私」の對立である。蘇頌がこの詩の最後でいいたいの、まさに彼自身が感じた「公」と「私」との間に於ける衝突である。

公務に拘束されて妻との生活をともにできないという禁中宿直して初めて感じた朝官としての不自由さである。七句目の「別離不慣」に續くこの初めて體驗する不自由さそのものが、詩人に與えた第一の刺激であり、妻の登場はこの刺激の媒體であつたに過ぎないのである。

贈内詩の流れと元韻（姜）

(3) 李白の「贈内」

太常の故事はこの後、たびたび使われる。次ぎに例として擧げなければならないのは、李白の「贈内」である。

三百六十日 三百六十日

日日醉如泥 日日醉いて 泥の如し

雖爲李白婦 李白の婦と爲ると雖も

何異太常妻 何ぞ太常の妻と異ならん

詩は夫婦が離れている状況で作られたのではなく、何氣ない日常の中で戯れに作つたもののようにみえる。しかし、太常の故事を踏まえているところから、依然として離別は贈内詩の話題として使われていて、完全に離別から脱皮していないことが分かる。

この詩については、笈久美子氏に優れた論述がある。詩の中に表れた詩人と妻の関係については、「四句の詩に大きく存在するのは、彼が妻にむけた同情、憐憫の感情である。李白はここでなんら傷つてはいない」と、李白の心の底まで読みとつている指摘があるので、これ以上贅言す

する必要はないが、敢えて蛇足を加えるなら、以下のようなことが言えるかもしれない。この詩の讀者に與えるインパクトは、李白の妻よりは、李白自身である。冒頭の二句、詩の中心で、それは李白自身の自畫像のように、讀む人に強く印象づける。三句目の「李白婦」の中、「李白」という名前は、上二句の泥酔い姿に「がくぶち」を付けて、自畫像を完成させる働きを持つものである。そして、また「婦」という字に限定條件を加える働きをも持っている。このような「日日醉如泥」の夫を持つ妻は、齋宮を守る夫と年中ともに生活できない太常の妻と「何の異なることがあろうか」といい、更に妻としての立場から自己を省みる。李白のこの詩の最大の特徴は、こうした自己を客觀化して描くことにあると言えよう。

李白は、贈内詩を比較的多く作っている。この「贈内」のほかに、また「別内赴徵」、「秋浦寄内」、「在潯陽非所寄内」、「南流夜郎寄内」など十首がある。いずれも妻と離れている、或いは離別に臨んでいる時の作である。李白の妻との離別を詠う詩が、前掲の潘岳と蘇頌の詩と異なってい

るところは、自分自身の感情を直接に表現するのではなく、離れた妻が自分に對して抱いているであろう思いを中心に展開されているものが多いことであろう。しかし描寫對象とされる妻は、詩の中で動きはあるものの、一般の閨怨詩と變わる場所がないパターン化されたものである。特にこうした特徴が鮮明に顯れている例として、「自代内贈」という、妻の身に替わって、妻の自分への思いを詠う空想的な樂府風の作品を擧げることができよう。李白の贈内詩に「閨怨」の要素が多く含まれていることは、明の張之象が編纂した『唐詩類苑』の中に、李白の贈内詩が多く收められ、かつこうした贈内詩が人部の「閨情」という分類に屬していることから暗示されよう。

閨怨詩は男性社會に生まれた獨特な文學ジャンルであり、特定の一人の女性ではなく、弱い立場にいる女性たちの普遍的な感情を詠うものである。妻に贈る詩においても、そうしたパターン化した表現方法を取り、妻その人の性格がまるで傳わってこない李白のこれらの贈内詩と、潘岳と蘇頌の自己の感情だけを詠う贈内詩とは、それぞれ男性中心

意識の表と裏を成しており、その根底にあるのは同じもの
だと思われる。

先に検討を加えた李白の「贈内」という詩は、妻ではなく
詩人自身が登場するという点では、彼自身の贈内詩の中
では異色であるが、潘岳と蘇頌の詩に近いといえる。ただ、
妻の立場から自己を反省し始めたところ、単に受
動的に妻との離別から衝撃を受ける潘岳と蘇頌の態度とは
違っており、いささか變化が窺えよう。

(4) 權徳輿の特徴

權徳輿の文集の第十卷に收められている三十二首の詩は、
總てが妻に關する詩だと指摘され、また妻と對等の立場に
立って自らの人生を語る姿勢にその斬新さがあると先行研
究に認められている^⑩。しかし、膨大な量を有するにも關わ
らず、彼の妻に關する詩は、張之象の『唐詩類苑』の中で、
李白の贈内詩の類と一緒に並ぶものが一首もないのである。
『唐詩類苑』の「贈内↓閨情」の分類基準は別に検討する
必要があるだろうが、ここでは先ず權徳輿の詩が收められ

贈内詩の流れと元稹(姜)

ていない原因を考えよう。一つの理由として考えられるの
は、彼は李白に反して、詩題の中で「内」という字を使う
ことが極めて少ないのである。「寄内」と題する詩は三
首しかなく、多く使われているのは「寄内」、「寄贈」
など、相手が誰であるか明言しない題である。こうした詩
題に現れている表面上の特徴は、先行研究で指摘されてい
る彼が妻と對等の立場に立っているということに繋がって
いると思われる。李白の贈内詩と顕著な對照をみせる權徳
輿の詩に對して、もう一つ問わなければならないのは、彼
の詩に詠われている感情が潘岳や蘇頌の系列を引き繼いで
いるのかどうかという問題であろう。この點について詩を
検討してみることしよう。

彼は「新月與兒女夜坐聽琴舉酒」という詩の中で、

乃知大隱趣 乃ち知る 大隱の趣きの

宛若滄洲心 宛も滄洲の心の若きを

方結偕老期 方に偕老の期を結びて

豈憚華髮侵 豈に華髮の侵すを憚らんや

といい、妻との偕老を喜んでいる。また、「元和元年蒙恩

封成紀縣伯時室中封安喜縣君感慶兼懷聊申賀贈」という詩の中で、

更待懸車時 更に待つ 懸車の時

與君歡暮齒 君と暮齒を歡しむを

と、妻との老後の生活を楽しみにしている心情を語っている。

夫婦の偕老を詠うことは、從來離別を中心に詠われた贈内詩にとって、晝期的な意義をもつものである。外部の何らかの原因によって、夫婦が別れなければならぬ状況に陥る場合、やむを得ず正常な生活秩序が奪われてしまい、その不如意から引き起こされた感情のあり方は、失われた生活秩序を懐かしむという受動的な傾向にある。それとは違つて、これからの夫婦の時間を楽しもうという未來指向の感情を詠い始めたことが、贈内詩の文學としては、離別の枠から完全に離脱して、新しい内容を盛り込む姿勢が備わつたという大きな意味を持つことになる。悼亡詩と原點を同じくする贈内詩は、潘岳の「内顧詩」から出發して、權德輿に至つてようやく一つの新段階に登つたと言えよう。一方、こうした文學の内容の變化が、社會の政治を擔う

詩人にとっては、家庭は公務と並んで、無視できない重要な存在となつてきたという時代の變化をも裏付けていると言えよう。次に擧げる「中書夜直寄贈」という詩は、同じ禁中宿直の際に作られた贈内詩でありながら、前掲蘇頌の詩とは異なる感情が表されているのである。

通籍在金閨 通籍して 金閨に在り

懷君百慮迷 君を懷いて 百慮迷う

迢迢五夜永 迢迢として 五夜永く

脈脈兩心齊 脈脈として 兩心齊し

步履疲青瑣 屐を歩ませて 青瑣に疲れ

開緘倦紫泥 緘を開いて 紫泥に倦む

不勘風雨夜 勘えず 風雨の夜

轉枕憶鴻妻 枕を轉じて 鴻妻を憶うに

蘇頌との違いは、五、六句目の「疲」と「倦」に現れていると思う。同じく「金閨」、「青瑣」、「紫泥」など禁中にしかないものに言及しているけれども、權德輿はこれらのものに對する倦怠感をはつきり表している。公務に縛られる不自由に對する捉え方は蘇頌とは違い、「公」と

「私」の對立の中で、「公」の比重が軽く、「私」のほうに傾いた權徳輿の態度が讀み取れるのではなからうか。蘇頌にとつて、この不自由さはただの新鮮な刺激に過ぎなかつたが、權徳輿の場合は、それはもはや本當の意味での不自由となつてゐるに違ひない。蘇詩と比べて、妻への感情がより多く表現されているのもそのためであらう。また、前掲「新月與兒女夜坐聽琴舉酒」という詩の中では「乃知大隱趣」といい、この詩の中では「鴻妻」という隱逸者梁鴻の妻に自分の妻を喩えている箇所などからもそういう變化が感じ取られる¹⁸。

しかし、權徳輿のこうした意識上の變化は彼の詩の中に明らかに顯れてはいるが、それはあくまでも詩人自身の感情であり、妻は依然として詩人自身の感情を述べる對象として存在するだけで、妻の感情を讀み取るとは難しい。この意味では潘岳と蘇頌の詩とは質的な變化がないのである。「詩人自身↑妻」から「詩人自身↓妻」へと移行するには、もう少し時間を要する。

贈内詩の流れと元稹（姜）

三 白居易の妻に關する詩

白居易の妻に關する詩は江州左遷期を境に前後の二つの時期に分かれていて、それぞれに特徴がある。

(1) 江州左遷まで

白居易の妻に關する詩の中では、「贈内」、「寄内」などと題する詩は全部で五首ある。この五首の中、一首だけは江州について聞もない時に作られたのであるが、ほかの四首はすべて江州期以前の作である。また張之象の「唐詩類苑」にはこの五首が全部收められている。ではこれらの詩にはどのような變化が見られるか、一首ずつ検討してみる。

先ず最も早い作品、彼が妻楊氏と結婚する當初に作った「贈内」という詩を考えよう。

生爲同室親	生きては	同室の親と爲り
死爲同穴塵	死しては	同穴の塵と爲る
他人尙相勉	他人すら	尙お相勉 <small>はげ</small> ます
而況我與君	而るに況や	我と君とをや

黔婁固窮士

黔婁 固より窮士

妻賢忘其貧

妻賢なりて 其の貧を忘る

冀缺一農夫

冀缺 一農夫

妻敬儼如賓

妻敬いて 儼むこと賓の如し

陶潛不營生

陶潛 生を營まず

翟氏自爨薪

翟氏 自ら薪を爨く

梁鴻不肯仕

梁鴻 肯えて仕えず

孟光甘布裙

孟光 布裙に甘んず

君雖不讀書

君 書を讀まずと雖も

此事耳亦聞

此の事 耳にも亦た聞く

至此千載後

此に至りて 千載の後

傳是何如人

是れ 如何なる人かを傳う

人生未死聞

人生まれて 未だ死せざる間

不能忘其身

其の身を忘るる能わず

所須者衣食

須める所の者は 衣食にして

不過飽與溫

飽と溫とに過ぎず

蔬食足充飢

蔬食 飢を充たすに足れば

何必膏梁珍

何ぞ必ずしも 膏梁の珍ならんや

繪絮足御寒

繪絮 寒を御くに足れば

何必錦繡文

何ぞ必ずしも 錦繡の文ならんや

君家有貽訓

君の家に貽訓有り

清白遺子孫

清白を子孫に遺すと

我亦貞苦士

我も亦た貞苦の士

與君新結婚

君と新たに結婚す

庶保貧與素

庶わくは貧と素とを保ち

偕老同欣欣

偕老して同に欣欣たらん

詩は、黔婁、冀缺、陶潛、梁鴻のような隱者たちの妻の賢明さを引き立てて、裕福でない生活に甘んじてくれることを妻に要求したのである。清貧な暮らしであっても、二人は仲良く一緒に年をとっていかうという夫婦偕老の理想を掲げて、これから始まる結婚生活の設計圖を描くように、白居易は妻に語ったのである。

夫婦偕老の意識を結婚する當初に打ち明けるのは、權徳輿が年を重ねてから意識したのに比べ、一層鮮明に時代の變化を示している。この點のほかにもまだ二つの點において白居易の特徴は現れている。

一つは、詩の中で「君雖不讀書」というように、白居易の妻、楊氏には、この詩を理解することが難しているのは、文字のかたちで表現したことである。それは、白居易自身にとって、文學で夫婦生活の理想を掲げることが必要であったからではなからうか。前掲の權徳與の場合は、妻の崔氏が教養のある人であつて、彼女と詩文の交流ができたので、自然に贈内詩の創作に至つたと考えられ、もしそうだとすれば、白居易の場合は、意識的に贈内詩の創作に取り組む姿勢が現れていると言えよう。

もう一つは、白居易が『白氏長慶集』の中で、この詩を「諷諭詩」に編入したことである。白居易の「達則兼濟天下、窮則獨善其身」については、説明を要しまい。彼は「與元九書」でいう。「故僕志在兼濟、行在獨善。……謂之諷諭詩、兼濟之志也；謂之閑適詩、獨善之義也。（故に僕志は兼濟に在り、行いは獨善に在り。……これを諷諭詩と謂うは、兼濟の志なり、これを閑適詩と謂うは、獨善の義なり。）」
「兼濟之志」を託した「諷諭詩」の中にこの詩を入れたのは、この贈内詩が、彼にとって、個人のレベルを越える意

贈内詩の流れと元稹（姜）

味を持つ作品であつたことを示している。言い換えれば、彼の生きる時代では、このような夫婦生活の様式は一種の普遍的意義をもつものだったのである。社會の要求に應じて作られたこの作品の中の、貧困な生活に甘んじて欲しいという妻に對する氣持ちから、男性社會における男性の絶對的な權威に幾らか變化が生じたことが感じられよう。^②
ほかの贈内詩からも、このような妻に對する氣持ちの微妙な變化が窺える。

桑條初綠卽爲別

爲し

桑條初めて綠なりて 卽ち別れを

柿葉半紅猶未歸

柿葉半ば紅くなるも 猶お未だ歸

らず

不如村婦知時節

如かず 村婦の時節を知り

解爲田夫秋搗衣

解く田夫の爲に秋に衣を搗くに

母親の喪に服していた時、下邳で書かれた「寄内」と題するこの詩は、暫く別れていた妻に對する思いを語るもので、まだ從來の贈内詩の痕跡が残っているが、妻を必要とする感情も垣間見える。次に擧げる二首は、妻に對する細

やかな氣配りを表現している。

漠漠暗苔新雨地 漠漠たる暗苔 新雨の地

微微涼露欲秋天 微微たる涼露 秋ならんと欲する

天

莫對月明思往事 月の明るきに對して 往事を思う

莫かれ

損君顔色減君年 君の顔色を損して 君の年を減せ

ん

〔贈内〕

三聲猿後垂郷涙 三聲の猿の後 郷涙を垂れ

一葉舟中載病身 一葉の舟の中 病身を載す

莫凭水窓南北望 水窓に凭りて 南北を望む莫かれ

月明月暗總愁人 月明月暗 總て人を愁えしむ

〔舟夜贈内〕

淡々と語られた言葉に、妻に對する愛情が濃厚にこめられてゐる。離思を詠うことから始まった贈内詩は、もとより抒情が目的であるが、しかしこれまで見てきた贈内詩に詠われていたのは、詩人自身の感情にしても、閨怨詩のよ

うな詩人の空想による妻の感情にしても、妻の本當の感情は考慮されていなかったのである。ようやく妻の氣持ちまで案じる餘裕ができた白居易のこの二首の詩は、意義が大

(2) 江州期以後の詩

江州に着いて間もなく作つた「贈内子」は、江州以前の抒情を中心とする詩と違つて、日常生活についての描寫が多く爲された生活感溢れる作品となつてゐる。

白髮方興嘆 白髮 方に嘆きを興し

青娥亦伴愁 青娥も亦た愁いに伴う

寒衣補燈下 寒衣 燈下に補い

小女戲床頭 小女 床頭に戯れる

暗澹屏帷故 暗澹として 屏帷は故く

淒涼枕席秋 淒涼として 枕席は秋なり

貧中有等級 貧中に等級有り

猶勝嫁黔婁 猶お勝る 黔婁に嫁するに

冬を迎えようとする深秋の季節、寒衣を繕う妻とその側

で遊ぶ娘を目にして、白居易は自分の不遇と貧乏な暮らしを嘆く。だが、妻も一緒に気持ちが悪入ってしまったのを感して、白居易は「また黔婁に嫁ぐよりはましだ」と、妻を慰めたのである。詩は、最後の二句だけ、妻との二人の間の對話であつて、それまでは、まるで第三者の目でみているような白居易と妻との日常生活の一コマである。

この詩を最後に、以後白居易は「贈内」、「寄内」と題する詩を次第に作らなくなり、「妻初授邑號告身」、「家釀新熟、每嘗輒醉、妻侄等勸令少飲、因成長句以諭之」などの詩題を見れば分かるように、日常生活の中の出来事に即して詩を作るようになったのである。例として「二年三月五日、齋畢開素、當食偶吟、贈妻弘農郡君」を見よう。

(前略)

山妻未舉案 山妻 未だ案を擧げざるに
饑叟已先嘗 饑叟 已に先に嘗す
憶同牢盂初 憶えば 牢盂を同じくせし初め
家貧共糟糠 家貧しく 糟糠を共にす
今食且如此 今 食は且つ此くの如し

贈内詩の流れと元韻(姜)

何必烹猪羊 何ぞ必ずしも 猪羊を烹せん

況觀姻族間 況や 姻族の間を觀るに

夫妻半存亡 夫妻 半ば存亡するをや

借老不易得 借老 得易からず

白頭何足傷 白頭 何ぞ傷むに足らん

食罷酒一杯 食 罷りて 酒 一杯

醉飽吟又狂 醉飽して吟じ 又た狂う

緬想梁高士 緬かに想う 梁高士

樂道喜文章 道を樂しみて 文章を喜こゝろみ

徒誇五噫作 徒らに五噫の作を誇るも

不解贈孟光 解く孟光に贈らざるを

結婚當初に作った「贈内」の詩で描いた理想圖の通りに、仲良く共に年をとってきた喜びを表現するこの詩は、最後の四句で、結婚當初の「贈内」詩の中でも觸れていた梁鴻という隱者の故事を再び踏まえ、「五噫」で文名の高い梁鴻でさえ妻の孟光のために文章を作ったりはしなかったといい、文學に妻との睦ましい生活を表現しているという自覺を白居易は誇らしげに詠ったのである。

江州期以後の白居易の「閑適」生活においては、妻は缺かせない存在となっている。こうした生活を描く彼の文學の中では、詩題は妻と關わりがなくても、妻が登場する時がかなりある。

病看妻檢藥 病みて妻の檢藥するを看め
寒遣婢梳頭 寒くして婢に頭を梳らしむ

〔秋寒〕

妻教卸烏帽 妻は 烏帽を卸さしめ
婢與展青毡 婢は 與に青毡を展げん

〔偶眠〕

頭痛牙疼三日臥 頭痛みて牙も疼く 三日臥すれば
妻看煎藥婢來扶 妻は見て藥を煎す 婢は來たりて

扶す

〔病中贈南隣覓酒〕

夫妻老相對 夫妻老いて 相對し
各坐一繩床 各おの 一繩の床に坐る

〔三年除夜〕

白居易は、生活の上で妻を必要とする感情から、妻に對

する細かな氣遣いまで、全面的に夫婦の生活や感情などを文學のなかで表現し、幸せな家庭像を立體的に彫り上げたのである。彼の「中隱」思想が、このような贈内詩の生まれた土壌であろう。

贈内詩は白居易にいたって、單なる抒情的なものから、妻との日常生活の實態をも描くものへと變化した。また、單なる抒情的な詩にしても、詩に現れている感情は詩人自身の一方的な感情ではなく、妻の本當の氣持ちに詩人が氣付くようになり、また妻との心の交流も詩の中で感じられるようになったのである。

このような變化を背景にして、白居易の詩と比較しながら元稹の詩をみてみよう。

四 元稹の場合

元稹は、悼亡詩以外に、妻に言及することが白居易より少ない。先妻韋叢の生前に言及する詩は、「望驛臺」という詩が残っているが、公務で韋叢と離別した際ので、七言四句、従來の離思がテーマであるので、ここでは觸れな

いことにする。^② 繼室の裴淑に言及した詩は、現存詩集卷九
「傷悼詩」に收められているものを除けば、八首ある。以
下三つに類別して見ていこう。

(1) 憂える妻と驚く妻

元稹も白居易と同様、自分の家庭生活を描くことはある
が、白居易のように家庭に満足している夫婦生活の理想的
な場面を描くことがない。白居易は元和十四年忠州刺史時
代に作った「竹枝詞」四首その四の中で、當時通州司馬を
している元稹の詩についてこういう、

江畔誰人唱竹枝

江畔 誰人か 竹枝を唱う

前聲斷咽後聲遲

前聲は斷咽し 後聲は遅し

怪來調苦緣詞苦

調の苦しきを怪しめば 詞の苦し
きに緣り

多是通州司馬詩

多くは是れ通州司馬の詩ならん

元稹詩の特徴は、まさに白居易のいう「苦」の一字であ
る。先ず元和十一年に書かれた「景申秋」と題する連作八
首の其四を擧げてみると、

贈内詩の流れと元稹(姜)

瓶瀉高檐雨

瓶に瀉ぐ 高檐の雨

窓來激箭風

窓に來たる 激箭の風

病憎燈火暗

病みて憎む 燈火の暗きを

寒覺薄幃空

寒くして覺ゆ 薄幃の空しさを

婢報樵蘇竭

婢は 樵蘇の竭くるを報じ

妻愁院落通

妻は 院落の通るを愁う

老夫慵計數

老夫 計數に慵く

教想蔡城東

蔡城の東を想わしむ

病いにかかっている風雨の夜、暖をとる薪も切れて、妻
が風を防げない家屋を心配している困窮した状況。次に擧
げる「瘴塞」も通州で病氣になった時の詩である。

瘴塞巴山哭鳥悲

瘴に巴山に塞され 哭く鳥も悲し

紅粧少婦斂啼眉

紅粧の少婦 啼眉を斂す

殷勤奉藥來相勸

殷勤として藥を奉げて 來たりて
相勸め

云是前年欲病時

云う是れ 前年病まんと欲するの
時と

啼きながら薬をもつてきてくれる妻の姿が生き生きと書かれていたが、詩はそこで止まっていた。妻を慰めようともせず、妻の悲しみはただ自らの悲哀を引き立てる役割をはたしているに過ぎなかった。題も「瘴塞」といい、病氣がちな自分が表現の中心となつてゐる。元稹の詩に現れる妻の像は、常に哀愁を伴う。白居易の前掲詩の中には、同じく詩人が病氣にかかつてゐる状態が描かれてゐるが、妻について、ただ「檢藥」の動作だけを描き、妻の情態には觸れなかつた。白詩の中で、唯一妻の「愁」に言及してゐるのは、前掲江州司馬の時に書いた「贈内子」である。しかし、その詩では、「白髮方興嘆、青娥亦伴愁」とあるように、白居易の氣持ちに影響され、妻が沈んでしまったのであり、また詩人は、そんな妻の氣持ちを察して、かえつて明るい口調で妻を慰めたのである。元詩では、そのような夫婦間の心の交流がまったく見られず、妻の憂いそのものが書かれてゐるだけである。

次に擧げる「得樂天書」の中でも、妻に關してはその驚きだけが言及されてゐるにすぎない。

遠信入門先有淚 遠信 門に入りて 先ず涙有り

妻驚女哭問何如 妻は驚きて女は哭き 如何と問う

尋常不省曾如此 尋常 曾て此くの如きを省ず

應是江州司馬書 應に是れ 江州司馬の書なるべし

白居易の手紙が届いたので、開封する前からあまりの感激で思わず涙をこぼす。そんな元稹の異常な態度をみて、妻と子供が驚き、慌てて原因を訊ねる、という場面。詩に表現したいのは、白居易との友情であることは言うまでもない。

(2) 妻との間に横たわる問題

元稹はまた、妻との二人の間における後繼ぎの問題を詩にする。偶然にも白居易も男の子に恵まれなかつた。この問題に對しても、同じ境遇にある親友である二人の態度は異なつてゐる。元稹は「聽妻彈別鶴操」という詩を残してゐる。

別鶴聲聲怨夜弦 別鶴聲聲 夜弦を怨み

聞君此奏欲潸然 君の此の奏を聞きて潸然たらんと

欲す

商瞿五十知無子 商瞿は五十にして 子無きを知り
便付琴書與仲宣 便ち琴書に付して 仲宣に與う

「別鶴操」という琴曲について、『樂府詩集』には次のように記録されている。²³

崔豹『古今注』曰、「別鶴操」、商陵牧子所作也、娶妻五年而無子、父兄將爲之改娶、妻聞之、中夜起、倚戶而悲嘯、牧子聞之、愴然而悲、乃援琴而歌、後人因爲樂章焉。『琴譜』曰、琴曲有四大曲、「別鶴操」其一也。將乖比翼隔天端、山川悠遠路漫漫、攬衣不寢食忘餐。

崔豹の『古今注』に曰く、「別鶴操」、商陵の牧子の作る所なり、妻を娶りて五年にして子無し、父兄將に之れが爲に改娶せんとす、妻之れを聞き、中夜に起きて、戸に倚りて悲嘯す、牧子之れを聞き、愴然として悲しみ、乃ち琴を援りて歌う、後人因りて樂章と爲す。『琴譜』に曰く、琴曲に四大曲有り、「別鶴操」は其の一なり。

將に比翼に乖きて天の端に隔てられ、山川は悠遠とし

贈内詩の流れと元稹(姜)

て路は漫漫たり、衣を攬りて寝ねもせず食も餐を忘る。

子供ができず妻は去るといふ七出の禮教にまつわる悲劇である。卞孝萱氏の『元稹年譜』によると、この詩は、大和二年、元稹五十歳の作とされている。

商瞿は、孔子の弟子で、『史記・仲尼弟子列傳』²⁴の司馬貞の索隱に、「家語云、瞿年三十八無子、母欲更娶室、孔子曰、瞿過四十當有五丈夫子、果然(家語に云わく、瞿年三十八にして子無し、母更に室を娶らんと欲す、孔子曰く、瞿四十を過ぎて當に五丈夫子有るべしと、果たして然り)」とある。元稹は、商瞿の故事を踏まえて、五十になつても息子ができず、自分の跡を繼いでくれる人がいない無念さを洩らしたのである。

白居易は妻に關する詩の中では、子供の問題に觸れることはなかつた。また、元稹と同じく「別鶴操」という曲を聞いても、必ずしも子が無いという問題に繋がることはなかつた。ここで對蹠的な例として、白居易の「雨中聽琴者彈別鶴操」という詩を擧げることができる。

双鶴分離一何苦 双鶴分離して 一に何ぞ苦しき

連陰雨夜不堪聞 連陰雨夜をして 聞くに堪えず

莫教遷客婦婦聽 遷客と婦婦に聽かしむること莫か

れ

嗟嘆悲啼詆殺君 嗟嘆と悲啼は詆りて君を殺す

同じく子供の問題を抱えている白居易でも、別鶴操を聞いた時、子供の問題は連想しなかつたのである。實は、元稹

にはもう一首同じ題の五言仄韻十二韻の詩がある。逸したが、白居易の和詩から、それも子供の問題が中心となつていたことが分かる。

和微之聽妻彈別鶴操、因爲解釋其義、依韻加四句

義重莫若妻 義の重きは妻に若くは莫し

生離不如死

誓將死同穴

其奈生無子

商陵迫禮教

婦出不能止

(中略)

寫之在琴曲

之れを寫して 琴曲に在り

聽者酸心髓 聽く者 心髓を酸ましむ

況當秋月彈 況や 秋月に當たりて彈き

先入憂人耳 先ず 憂うる人の耳に入るをや

怨抑掩朱弦 怨抑して 朱弦を掩い

沈吟停玉指 沈吟して 玉指を停む

一聞無兒嘆 一たび兒無きの嘆きを聞き

相念兩如此 相念う 兩つながら此くの如きを

無兒雖薄命 兒無きは薄命と雖も

有妻偕老矣 妻有りて偕老す

幸免生別離 幸いに生きて別離するを免る

猶勝商陵氏 猶お商陵氏に勝る

詩題で「因爲解釋其義」といつているように、元稹に對

して自分の意見を聞かせようとするのが白居易の態度である。詩は商陵の故事を述べ、禮教に迫られて、仕方なく妻

と別れる悲しさを強調する。終わりは、妻の琴曲を聞いて、後繼ぎのことを思い出した元稹に對して、次のように説いて

いる。「子供がないのは確かに不幸なことだが、幸いに一緒に年をとっていく妻がいるんだ。生き別れした商陵

より、まだよいほうではないか」と。同じ境遇にいる親友に、白居易は自分の夫婦偕老の理想を以て、慰めようとしたのである。

(3) 妻との齟齬を詩材に

裴淑は、よく琴を引いた。その琴曲に惹かれて、元稹もよく詩を作ったのである。それは決して前掲權徳輿の「新月與兒女夜坐聽琴舉酒」詩の中で描寫されていたような、

笑語向蘭室 笑語 蘭室に向き

風流傳玉音 風流 玉音を傳う

という喜ばしい雰囲気ではなかった。次に擧げる詩でも、「別鶴操」の曲に言及している。

「黃草峽聽柔之琴」二首（馬注：柔之、公繼室裴夫人也）

胡笳夜奏塞聲寒 胡笳 夜奏すれば 塞聲寒し

是我鄉音聽漸難 是れ我が郷の音 聽くに漸く難し

料得小來辛苦學 料り得たり 小來辛苦して學ぶを

又應知向峽中彈 又た應に知るべからんや 峽中に

贈内詩の流れと元稹（姜）

て弾くを

別鶴凄清覺露寒

別鶴は凄清として 露の寒きを覺

離聲漸咽命難難

離聲漸く咽びて 難の難きを命と

憐君伴我涪州宿

す 憐れむ 君の我に伴いて涪州に宿

猶有心情徹夜彈

るも 猶お心情有りて夜を徹して彈ずる

を

詩は、元和十四年の春、嘉陵江に沿って、通州から虢州へ轉任する途中、涪州に泊まった時の作とされている。二首とも同じ構造をとっており、前半では、琴音の聞き難さを描寫し、後半二句は、琴を弾く人に視線を向けている。琴曲は一首目の漢の蔡琰の「胡笳十八拍」という曲と、二首目の前の詩でも觸れた「別鶴操」という曲で、いずれも悲哀に満ちた曲である。一首目の後半は、小さい頃から苦勞して學んだ琴を弾く技を、まさかこんな邊鄙な黃草峽で

披露するとは思わなかつただろうと、琴を弾くこと自體が
いまのこの居場所に相應しくないと、思いを前面に押し
出している。二首目は、「憐」という字に、妻が自分につ

きそつて、轉々とせざるをえない不安定な生活を送つてい
ることに對して、申し譯ない氣持ちが垣間みえるけれども、
「憐」の内容はというと、夫と涪州という地に泊まつてい
るにも關わらず、なお夜遅くまで琴を弾いている妻裴淑の

行爲。悲しい琴曲を聞いて、心が沈んでしまつた夫の氣持
ちを察して、いらない裴淑である。このような夫婦の間におけ
る氣持ちの上での食い違いが、詩題にも表れていると思ふ。
詩題に「柔之、公繼室裴夫人也」と注が施されたのは、詩
題の中で妻の字を使うのは稀なことで、ほかの人にはわか
らないためであらう。これまでみてきた妻に關する詩の中

では、妻の名前が公言されることはなかつた。詩のなかで
は、彼女たちは詩人の妻という身分で登場し、その身分に
相應しい感情のあり方や行動をとる。それとは違つて元積
の詩では、妻を一人の獨立した人間として見なし、自分と
相通じない行爲を避けずに描いたのである。避けるどころ

か、むしろ元積は、妻と自分との氣持ちの上での食い違い
をわざと詩に持ち込んだといえよう。それによつて、自ら
の不遇や不如意を引き立てようとしたのである。

續いてみる二首は、このような傾向が更に強い。

先ずは、元積が長慶三年、僅か三ヶ月の宰相を辭し、同
州刺史から越州刺史、更に浙東觀察使に轉じた時の詩「初
除浙東、妻有阻色、因以四韻曉之」である。

嫁時五月歸巴地 嫁せし時は五月 巴地に歸り

今日双旌上越州 今日双旌 越州に上る

興慶首行千命婦 興慶にて首行たり 千の命婦

「自注：豫在中書日、妻以郡君朝太后於興慶宮、猥爲班
首（豫は中書に在りし日、妻は郡君を以て太后に興慶宮にて朝し、
猥りに班首と爲る）」

會稽旁帶六諸侯 會稽は旁らに帶ぶ 六の諸侯

海樓翡翠閑相逐 海樓 翡翠 閑かに相逐い

鏡水鴛鴦暖共遊 鏡水 鴛鴦 暖かくして共に遊ぶ

我有主恩羞未報 我は主恩有るも 未だ報いざるを

羞じ

君於此外更何求　君は此の外にて更に何を求めんや
詩は、詩題で明言しているように、夫の新たな任命に對して、都を離れて同行することを流る裴淑を説得するためについたものである。この詩に現れた裴淑の態度に注意を拂ったのは陳寅恪氏である。

案微之此詩、詞雖美而情可鄙、夫不樂去近甸而就遐蕃、固人情之恒態、何足深責。而裴氏之渴慕虛榮、似不及韋氏之能安守貧賤、自可據此推知。

案ずるに微之のこの詩、詞は美なりと雖も情は鄙しむべし、夫れ近甸を去りて遐蕃に就くを樂しまざるは、固より人情の恒態なり、何ぞ深く責むるに足らんや、而るに裴氏の虚榮を渴慕するは、韋氏の能く貧賤を安守するに及ばざるに似る、自ずから此れに據りて推知すべし。

陳寅恪氏という裴淑の虚榮を表に出すことが元稹の本意であったかどうかは別として、妻の裴淑にこのような非難を招いたのは、元稹が夫の公務にまで口を出す妻を詩にしたからであろう。これまで検討してきた夫婦の睦ましい關

贈内詩の流れと元稹（妻）

係ばかりを詠う詩と比べて、決して妻として譽めることのできない行爲を詩に描くことが、元稹の詩を他の詩と一線を畫すものになっているのである。

權徳輿の妻と同じく、裴淑も詩文のできる人であった。しかし、權徳輿が自ら「公」より「私」の方に目を向けたのと違って、元稹は「公」に於ける義理を以て、妻を説得しようとしたのである。陳寅恪氏に指摘されたように、都を離れ難い氣持ちは裴淑だけの心情ではなく、「人情之恒態」として、元稹本人の心情でもあろう。むしろ、宰相を免じられて聞もない元稹にとって、地方官として赴任することは、妻以上に受け入れにくいことではなかつたらうか。詩の最後で君主の大義を以て、妻を説得するのは、元稹本人が自分を納得させようとしていたようにも見える。

次に見る詩も、この詩と大變似たような情況で作られたものである。元稹が都に戻って聞もなく、大和四年の正月、再び地方へ任命された時の「贈柔之」という詩である。

窮冬到鄉國　窮冬　鄉國に到り

正歲別京華　正歲　京華に別る

自恨風塵眼 自ら恨む 風塵の眼

常看遠地花 常に遠地の花を看るを

碧幢還照曜 碧幢 還た照曜し

紅粉莫咨嗟 紅粉 咨嗟する莫かれ

嫁得浮雲婿 嫁し得たり 浮雲の婿に

相隨即是家 相隨う 即ち是れ家なり

全唐詩の中には、裴淑の答詩も収録されている。その注にいう。「積自會稽到京、未踰月、出鎮武昌、裴難之、積賦詩相慰、裴亦以詩答（積は會稽自り京に到り、未だ月を踰えずして、出でて武昌に鎮す、裴は之れを難じ、積は詩を賦して相慰む、裴も亦た詩を以て答う）。裴淑の詩題の注から分かるように、この詩も、都を離れて地方へ赴任するに際して作ったものである。夫の赴任に對して、裴淑が都から離れたくない氣持ちを告げた。その妻の氣持ちを元積が慰めようと目的で詩を作ったとされている。しかし元積の慰め方は、やはり白居易とは明らかに違う。白居易は常に自分の狀況よりもっと不幸な狀況と比べて、いまの現狀に満足を見出そうとしたのである。前掲の詩で、黔婁と比べて

まだまし、子供がいなくても、妻と生き別れた商陵よりはまた良いほう、などの言い回しが例として挙げられる。これに對して、元積は理想的な狀態を求めずともないのを察した上、仕方なく懸命にいまの狀況に甘んじようとする態度をとっている。前詩の最後の句で、君於此外更何求」といい、後詩の終わりにも、碧幢還照曜、紅粉莫咨嗟、嫁得浮雲婿、相隨即是家」と、まだ官職には就いているから、ため息はつかないで、浮雲のように轉々とする夫に嫁いだ以上、行き着いたところを家と思わなければならぬ、仕方ないことだ、というのである。官僚としての使命にまで異議をさしはさむ妻を詩の題材とすることは、妻に關する詩の中では、いままでもなかつた。妻を説得しようとする元積の態度の背後に、彼自身の心の中の葛藤が窺えよう。

以上、元積の詩を通覽してきた。元積も白居易のように文學として高い段階まで到達していながら、相反する方向へと向かつていたように見える。白居易は妻の氣持ちを察

し、妻と向かい合つて融合を求めているのに對して、元稹の描いた妻は、夫の氣持ちを配慮せずに一人歩きをしてるのである。白居易が賢妻の典型を作り出したのに對して、元稹の詩はもつとリアルに、妻として失格と言へる行動まで含めて妻の人格を忠實に描き出している。そこに彼の特徴が鮮やかに現れている。

しかし彼がこのような描き方をとつたのは、妻の行爲を前面に出すことによつて、自分にまつわる様々な困難を表現しようとするからである。白居易の「公」から離れた「私」的世界に浸っている態度とは對照的に、元稹には公務と家庭を別々に見なすことができず、「公」と「私」のアンバランスの中で苦惱しているようである。白居易の問題を解決しようとする姿勢とは違つて、妻との間、つまり「公」と「私」の間に問題が起きるたびに、常にその問題及び自分の悩みをありのまま詩に取り入れる元稹の意識の根底には受動的な傾向がうかがわれ、その點ではまた贈内詩の原點に戻つていようにも見える。

五 結びにかえて

妻に關する詩の流れを顧みるのに、言及しなければならぬ詩人がもう一人いた。杜甫である。いままで觸れなかつた理由はというと、杜甫は詩の中で、妻に言及したことは三十數回あるにもかかわらず、閨怨詩のパターンを借りている李白とは對蹠的に、「贈内」や「寄内」と題する詩は、一首も作らなかつたからである。唯一の遠く離れた妻を思う詩「月夜」も、李白のように妻の自分に對する思いを詠うのではなく、杜甫自身の妻に對する本當の感情が詠われている。この「月夜」については川合康三氏が「不特定の女性の一般的狀況を詠う閨怨詩が、作者と作者自身の妻の事情を語るものに變質していることも、詩の内容が文學としての定型から個別的日常經驗へと變化する表れである」と指摘している²⁶。贈内詩の流れの中でみても、杜甫はやはり晝期を作つた詩人となるだろう。ここで詳しく詩を擧げることは略するが、單に妻を「老妻」、「病妻」などの言葉で形容し、決して妻を美化しないという點でも、從

來の妻に關する詩とは異なつていふと言えよう。^⑧

周知の通り、杜甫の文學に高い評價を與えたのは、元稹が初めてである。彼は「唐故工部員外郎杜君墓係銘」でいふ。「予讀詩至杜子美、而知小大之有所總萃焉（予は詩を讀みて杜子美に至り、小大の總べて萃あまる所有るを知れり）。元稹も杜甫と同じく、「贈内」、「寄内」と題する詩を作らなかつたことから、彼が杜甫と共通點を持つてゐることが分かるだろう。しかし、自己が賞賛した杜甫の博大さには元稹は及ぶことができなかったのである。確かに、詩題の面だけではなく、詩の内容からみても、杜甫の「老妻」、「病妻」などの言葉使い、妻を美化せず、生活感のこもつた妻をありのままに文學に表現する點と、元稹の賢妻像を描かず、自分との間で様々な問題を引き起こす存在として妻を描寫する點とは、相通じるところがあると言へる。しかし、悼亡詩の悲しみという限られた感情のあり方とは違つて、實際の生活に於ける妻との間の感情のあり方は多様なはずである。杜甫には、「月夜」という離れた妻を思う詩もあれば、「聞官軍收河南河北」の詩に「却看妻子愁何在、漫

卷詩書喜欲狂」とあるように、妻と共に喜びを感じる時もある。しかし元稹は妻を描寫の對象としながら、單に妻との絆を歌い上げる詩には興味を示さなかつたのである。彼は妻との間に實際に横たわつてゐる問題を前面に押し出すことによつて、自分の不遇や不幸など現實の様々な問題をそのまま取り込んでゐる。それが元稹の妻を詠つた詩の特徴である。

一方、彼は親友の白居易との間にも明らかな相違をもつてゐる。最後に彼と白居易の態度の違いがはっきり現われている詩を舉げて、筆をおきたい。

「秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字」 白居易

丈夫一生有二志 丈夫 一生 二志有り

兼濟獨善難得并 兼濟 獨善 并すこと得難し

不能救療生民病 生民の病を救療する能わざれば

即須先濯塵土纓 即ち須く 先ず塵土の纓を濯うべし

と、ふたつの志をもつ白居易に對して、元稹は「酬別致

用」という詩の中で、決して政治における理想を放棄しない終始一貫の志を強く表明していた。

達則濟億兆 達すれば則ち 億兆を濟い

窮亦濟毫釐 窮しても亦毫釐を濟う

濟人無大小 人を濟うに大小無し

誓不空濟私 空しく私を濟わざるを誓う

政治観に於いて同じ理想を持つ元稹と白居易は、若き時に一緒に「新樂府」を作り、その理想を詠ったのだが、人生観においては、かなり違っている。日常生活に關する詩の中でも、元稹は現實における困難な問題を取り入れていく。とうてい、現實から一段離れて、白居易のように個人生活における圓滿な理想を文學の中で詠うということはできなかったのである。理想と現實との間で、距離感を持っていない元稹の詩は、白居易と違って、重く、苦しい。妻を取り上げた兩者の詩を通觀した中にも、元白と併稱される二人の個性の違いは読みとることができよう。

註

① 元稹の悼亡詩について主な論述としては、陳寅恪『元白詩

贈内詩の流れと元稹(姜)

箋證稿」第四章「艶詩及悼亡詩」(上海古籍出版社、一九七八年版、初版は一九五〇年)、山本和義「元稹の艶詩及び悼亡詩について」(『中國文學報』第九冊、一九五八年十月)、入谷仙介「悼亡詩について——潘岳から元稹まで——」(『入矢教授小川教授退休記念中國文學語學論集』筑摩書房、一九七四年)、坂野學「元稹(夢井)詩試論」(『函館大學論究』第二十輯、一九八八年)、「元稹(三遣悲懷)詩覺書」(『函館大學論究』第二十一輯、一九八九年)などが挙げられよう。

② 例えば、清の蘅塘退士『唐詩三百首』の中で、「三遣悲懷」に對する「古今悼亡詩充棟、終無能出此三首範圍者、勿以淺近忽之」という評語はよく先行研究において言及される例であり、また、坂野學氏は注①の「元稹(夢井)詩試論」の中で、「これらの詩が優れた作品であることは、例えば、近年上海古籍出版社から發行された『唐詩鑑賞辭典』には元稹の詩が十四首選録されているのだが、そのうち六百までが悼亡詩であることから察せられよう」と指摘されている。一九九五年に出版された『唐代文學史』(人民文學出版社、中國文學通史系列)も、元稹の悼亡詩を高く評價しているが、蘅塘退士より早い評價があれば、ぜひ教えて頂きたい。

③ 以下引用する元稹の作品は、翼動點校『元稹集』(中華書局、一九八二年)を底本として用いる。

④ 元稹詩の繫年及び彼の生涯、家族状況については、下孝萱『元稹年譜』(齊魯書社、一九八〇年)に基づく。

- ⑤ 『中國文學報』第四十七冊、一九九三年。
- ⑥ 權德輿『權載之文集』卷十の詩については、河内昭圓「權德輿の贈婦詩について」(『大谷學報』第六十三卷第二號、昭和五十八年)、前掲中原論文及び蔣寅「權德輿與唐代的贈内詩」(『唐代文學研究』第七輯、廣西師範大學出版社、一九九八年)に論及されている。卷十の詩がすべて妻に關する詩であることについては、中原氏及び蔣寅氏に指摘がある。
- ⑦ 元稹詩集の傳承狀況については、花房英樹編『元稹研究』(葉文堂書店、昭和五十二年)に詳しい。簡略に紹介すれば、『新唐書・藝文志』に記載されている元稹の詩集『元氏長慶集』一百卷と小集十卷は、凡そ半分が散逸した。現在通行しているテキストは、宋刊本の六十卷本に據るものである。
- ⑧ 蔣寅氏は、注⑥の論文の中で、妻に關する詩は「寫妻子的詩」と「寫給妻子的詩」の二種類に分けることができると指摘されている。後者については妻に贈る詩であることが詩題からもすぐに分かるけれども、前者については、妻と直接に關わるかどうかによつてまた二つに分かれていと思う(例えば、杜甫は「自京赴奉先縣詠懷五百字」などの詩の中でも妻に言及するが、妻は主な表現對象とはなっていない)ので、本稿では妻を直接の對象とすかどうかを基準とする。
- ⑨ 潘岳の詩は、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局、一九八三年)に據る。
- ⑩ 吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」(『中國文學報』第十冊、一九五九年、第十二冊、一九六〇年、第十四冊、一九六一年)を参照した。
- ⑪ 潘岳の悼亡詩については、高橋和巳「潘岳論」(『中國文學報』第七冊、一九五七年)、齋藤希史「潘岳悼亡詩論」(『中國文學報』第三十九冊、一九八八年)などを参照した。
- ⑫ 本稿で言及した元稹以外の唐人の詩は、白居易の詩は朱金城『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)に據るが、ほかの作品はすべて『全唐詩』(中華書局、一九六〇年)に據る。
- ⑬ 宋范曄撰、唐李賢等注『後漢書』卷七十九下「儒林列傳」第六十九下(中華書局、一九六五年、第九冊、二五七八頁)。
- ⑭ 「李白論」(吉川幸次郎編『中國文學論集』、新潮社、昭和四十一年、一五八頁)。
- ⑮ 李白のこれらの贈内詩については、笈久美子「以「女性學」觀點試論李白杜甫寄内憶内詩」(『唐代文學研究』第三輯、廣西師範大學出版社、一九九二年)、注⑥蔣寅氏の論文に詳しい論述があり、参照された。
- ⑯ 權德輿の贈内詩については、注⑥の論文を参照した。權德輿と妻の關係については、例えば中原氏が「祇役江西路上以詩代書寄内」という詩を分析して、「この詩は、單に旅にあつて妻をなつかしむだけのものではない。權德輿にとつて、自らの生き方を語りかけるに足る存在で妻はあつたと思われる」と指摘している。

①7 寛久美子氏が注⑮の論文の中で、李白の詩に多く使われている「内」について、以下のように指摘されている。「這是在對外場合中指自己的妻子而言、是跨出夫妻二人的世界時所用的語彙。」權德輿は「内」という字を好まないことから、彼の詩は第三者を排除して、妻と二人の間で意味をもつものだと考えられよう。

①8 詩人たちが自分の妻を隱者梁鴻の妻孟光に喩えることについて、桐島薫子『晚唐詩人考』（中國書店、一九九八年）の附論「唐代の新孟光考」に詳しい考察があり、結論は要約すると以下の如くである。白居易、元稹、權德輿らが孟光に喩えた大族出身の妻たちは、隱者ではなく仕途にある夫に嫁し、公的には寒門の夫が貴門門閥の仲間入りをする階となりながら、私的には任官中、毀譽褒貶の荒波で挫折を味わう夫の精神的支柱となった。孟光故事の使用が中唐に生まれ定着していたことは、貴族社會から科擧出身者の抬頭する社會への移行という時代の要求に適合している現象である。

①9 白居易詩の創作年代は、朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）に據る。この「贈内」は元和三年、白居易三十七歳の時に書かれたものとされている。

權德輿の「偕老」に言及した數首の詩は、その内容からも晩年の作品だと分かるが、蔣寅『大歷詩人研究』（中華書局、一九九五年）下編第九章「權德輿作品繫年」によれば、「元和元年蒙恩封成紀縣伯時室中封安喜縣君感慶兼懷聊申賀贈」

贈内詩の流れと元稹（姜）

は權德輿四十八歳の時の作であり、もう一首の「新月與兒女夜坐聽琴舉酒」については記されていないが、「孫孩逸衣襟」とあるように、孫が生まれてからの作品であろう。孫の生まれた年について、「權德輿作品繫年」では、元和八年五十五歳で「端午日禮部宿齋有衣服綵結之貺以詩還答」（この詩も「偕老」に言及する）が書かれた時點において、孫はまだ生まれていない或いは生まれたばかりだと推測している。

②0 注⑥の權德輿に關する論文にも指摘されているように、權德輿の詩の中では妻との酬和詩も數多く含まれている。

②1 注⑮を参照。

②2 「望驛臺」の原文を掲げておく。「可憐三月三旬足、悵望江邊望驛臺、料得孟光今日語、不曾春盡不歸來」。

②3 宋郭茂倩『樂府詩集』第五十八卷、琴曲歌辭二（中華書局、一九七九年、第三冊、八四四頁）。

②4 「史記」卷六十七、「仲尼弟子列傳」第七、（中華書局、一九五九年版、第七冊、一三二—一頁）。

②5 「元白詩箋證稿」（上海古籍、一九七八年、一〇六頁）。

②6 興膳宏編『中國文學を學ぶ人のために』（世界思想社、一九九一年、九四頁）

②7 「月夜」を除いて、妻は杜甫の詩の中で占める比重がさほど大きくないけれども、いずれも生活感溢れる賢妻の形象である。杜甫の妻に關する詩については、注⑮寛久美子氏の論文と注⑤中原氏の論文に詳しい論述がある、参照されたい。

(附記) 本稿は、一九九九年六月二十六日に京大會館で開催された京都大學中國文學會第十四回例會においての口頭發表に加筆したものである。御論文から多く示唆を受けただけではなく、貴重なご意見も聞かせて下さった中原健二氏、ご教示を賜った寛文生氏、參考論文を送って下さった寛久美子氏をはじめ、各方面でお教えを頂いた多くの方々に、厚くお禮を申し上げます。